

スペイン語圏を知る本（その25）

「スペイン巡礼の本」

評者 坂東 省次

今年の夏、スペインは北西部に位置するガリシアに旅をした。目的は、この地方で使われているガリシア語の正常化がどの程度進んでいるかを調査することであったが、初めてこの地を訪れる私にとって、サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の訪問もまた、目的の一つであったことは言うまでもない。宿泊先のホテルから歩くこと10分、夢にまで見た憧れの大聖堂が眼前に現れた。サンティアゴと言えば『サンティアゴに雨が降る』という歌までであるほど雨の多い土地。だが、なぜか、私がこの地を訪れた数日は快晴の日が続き、スペインの群青の空がどこまでも続いていた。陽光を浴びた大聖堂の広場には、続々と巡礼者が到着する。彼らの顔には、大事業を成就した安堵と自信を覗かせていた。

ガリシアの州都ラ・コルーニャ大学で言語学を教える友人は、ここサンティアゴの出身だ。その彼によれば、子供の頃のこの町は、一年中、訪問客もない寒村にすぎなかったという。しかし、今では、巡礼者と観光客が世界各国から訪れ、年中、人が絶えることがない。

サンティアゴ・デ・コンポステラは世界三大聖地の一つ、ここを訪れる日本人も決して少なくはない。日本人でこの地を最初に訪れたのは誰であろうか。出版物から見ると、作家の小川国夫氏である。氏は1975年の旅から、大聖堂に関して日本で最初の本『古寺巡礼』（平凡社）を執筆した。1976年のことである。その後、サンティアゴ巡礼に関しては、矢野純一『スペイン巡礼の旅』（NTT出版、1997）、黛まどか『星の旅人』（光文社、2000）などが出版されているが、今年は次の4冊が出版されて、ブームの到来を告げているようだ。

壇ふみ、池田宗弘『サンティアゴ巡礼の道』（新潮社）、米山智美『スペイン巡礼の道を行く』（東京書籍）、中山瞭『スペイン街道物語』（JTB）

杉谷綾子『神の御業の物語 - スペイン中世の人・聖者・奇跡』（東京書籍）である。

『サンティアゴ巡礼の道』の著者の一人である池田宗弘氏は日本を代表する彫刻家であるが、1980年のスペイン留学の際、巡礼の道を踏破して、403頁に及ぶ『巡礼の絵巻』を描いた。その一部は数多くの巡礼路の写真とともに紹介されており、一見の価値がある。

「巡礼の道」はブラジル人作家コエーリョによって現代に蘇ったといってもよい。彼の本を読んで巡礼の道歩き、サンティアゴ・デ・コンポステラを訪れる人は多数に及ぶからだ。著者の一人である壇ふみさんはサンティアゴでコエーリョに初めて会い、初めて「巡礼の道」を歩いた。歩いたと言っても撮影のために車での移動となった。しかも、サンティアゴを立ててパリを目指したのであった。

コエーリョはこう言う、「巡礼とは生まれ変わること。今までの自分を捨てることなんだ。」「この道歩いて、あなたもまた、あたらしい自分を見つけてほしい」と。

コエーリョは巡礼の道を奇跡の道「カミーノ」として壇さんに紹介する。初めはカミーノに戸惑いを見せていた彼女も、そこを踏破した後、こんな感想を抱くのである。「篤い信仰心が、道を作り、橋を架け、建物を築き、奇跡を生んだ。カミーノでは、その一つ一つが魅力的である。だが、何よりも心に残ったのは、8百キロの道を行くなかで出会った人々であり、その人たちがカミーノに抱えてきた思いだった。カミーノは人生の縮図と、よく言われる。カミーノを歩くうちに、自分の人生を客観的に眺めることができる。自分にとって本当に大切なものが、見えてくることもある。」

『神の御業の物語』はガリシアに伝わる奇跡の解明に挑んだアカデミックな本である。その他の2冊は観光の書であるが、これら4冊を通して、巡礼がスペインや日本あるいは世界の各地で今日、なぜ盛んに行われているのか、一つの回答が得られるのではないだろうか。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）